

『大和物語』一五五段考

——男の視点／女の視点——

石田莉奈

一、はじめに

『大和物語』一五五段は、男が女を盗む話であって、一般的には「愛に生き、愛に死ぬ男女」^①の物語であると解釈される。男の愛情はその行動と心情によって示され、物語終盤においても、女への愛情ゆえに男が死んでいく様子が描かれる。しかし、この男の愛情に対して、女の愛情は具体的には「安積山」の歌によってしか示されていない。本文中にあらわれる女の心情表現は、「かぎりなくわびしかりけり」、「いとほづかしと思ひけり」の二か所のみであるが、どちらも男に対する愛情が読み取れる部分ではないのである。そのような、男に対する思いが描かれない文脈の中で、突然、女は男への愛を詠む。この文脈と歌とのちぐはぐさを払拭するため、多くの先行研究では、全ての事柄に「愛情ゆえに」という、もったもらしい理由を設けては、二人は愛し合っていたのだという幻想を作り上げている。しかしそれでは、女の心情に全く無頓着であると言わざるを得ない。

そのような研究状況の中で、女の視点から本段を読み、女の心情に着目することは、立石和弘氏によって既になされており、本段を拉致監禁の物語と捉え直す考察は興味深いものがあつた。立石氏は、女は愛情ゆえに死んだのではないとさ

れ、新たな解釈の提示が行われている。しかし、それでも結局は、「安積山」の歌に「男への愛を抱かざるをえないほど、女は追い詰められていた」という解釈を施し、女が愛情を詠んでいることは否定していない³⁾。もちろん他の先行研究を通覧してみても、「安積山」の歌に女の愛情を読み取ることは定説となっている。しかし、「和歌」以外の状況から考えると、はなはだ疑問である。女は本当に男を愛していたのであろうか。そして、本当に愛を詠んだのだろうか。女の行動から読み取れる心情には、まだ考察の余地があるように思う。本論文は、まず女の視点からその行動や状況を更に細かく読み直すことにより、女の心情の動きを辿っていく。そして、「安積山」の歌が詠まれた背景を再考し、本段に新たな解釈を加えようとするものである。

なお、引用する本文は全て、高橋正治校注・訳〈新編日本古典文学全集〉『大和物語』（小学館、平成六年一二月）による。

二、和歌が詠まれた背景

まずは和歌が詠まれた背景について、物語の展開を追いつながり考察したい。女の行動・状況としては、盗まれて庵に据えられる、妊娠して三日四日放置される、山の井に行き、歌を詠んで自殺する、という流れである。ここでは女が歌を詠むところまでに注目して、そこに至る経緯を「盗まれる」「妊娠する」「山の井に行く」の三点から確認していくこととする。

① 盗まれる女

本段において、女は「抱かれ」て盗まれる。小谷雅司氏は、物語文学に登場する「抱かれる」女について「抱かれる」

ことよって、女は自分の意思を打ち消され、自分の足をなくし、主体性を奪われ、男になされるがままの受動的な存在として描かれている⁴」ことを指摘している。本段の女も、男に「抱かれる」女であり、主体性を奪われる女として描かれていることは言うまでもない。またそれは、庵に据えられた後の描写からも明らかである。

安積の郡、安積山といふ所に庵をつくりて、この女をすゑて、里に出て物などはもとめて来つつ食はせて、年月を経
てありへけり。この男いぬれば、ただひとり物も食はで山中にゐたれば、かぎりなくわびしかりけり。

傍線部から、男がいなければ物を食うこともできない女の様子がうかがえる。柿本奨氏は、傍線部に関して「この男が里へ出かけてしまうと、女はただ独り何も食う気になれず山の中にいたので、限り無くわびしい思いであった。」⁵と訳をつけているが、その訳は女の心情に即しておらず、適切ではない。女は生活の全てを男に頼らざるを得ないのであって、「わびし」という心情は、文脈から考えても、男のいない寂しさからではないだろう。ここでの「わびし」は逼迫した、貧困ゆえの言葉だと考えられる。男がいないので食い物の世話をする者がおらず、物が食えないために「わびし」という感情を持つのである。それほどまでに、女は男に依存しているともいえよう。しかしその依存は、愛ゆえの依存ではなく、生活に根ざした依存である。

男は「抱く」ことで女の身体を奪い、主体性を奪い、その生活を奪う。そうして地位や環境などの様々なものを奪うことにより、女を自身の作った庵に囲い込んでいくのである。

② 女の妊娠——内側からの浸食——

女の妊娠に関しては、本文中で「かかるほどにはらみにけり」の一文のみで記され、女は死に際しても、自身の妊娠に

思い及ぶことはない。また、女の妊娠自体が物語の展開には深く関わっていないような印象がある。実際、本段の類話が掲載されている後世の作品、『古今著聞集』や『十訓抄』では女の妊娠は省かれているのだが、『大和物語』ではあえてこのように書かれたのだから、やはりそこに何らかの効果があると読むべきである。

先行研究においては、「女の懐妊を述べる一句が、二人の愛の成長を雄弁に物語っている」⁶など、男女の愛の愛の証明としての位置づけがなされているが、実際は愛情があるとなかろうと、その意思とは関係なく子供は授かるものである。よってこの一文から女の愛情を読み取ることは適切ではない。また、小嶋菜温子氏は本段を「妊婦の自殺譚」と捉えて、次のように述べている。

この話においてわかりにくいのは、なぜ女が死ぬのかという点であるが、本書は次のように解釈している。女がみずからの妊娠を自覚しないで自殺に走るのは奇異ともいえるが、高貴な女が家から隔離されているという設定からすると無理はない。母性^{II}〈産む性〉に関する教育を受ける機会が、女には与えられていないからである。己の妊娠を理解しないまま、つまり〈産む性〉から疎外されたまま男を想う女として死んでいった。⁷

小嶋氏の言う「母性」とは、「子を産み、すこやかに育てあげ、家や共同体に貢献する」⁸ことであって、それは教育によって身につくものである。つまり、本段の女は、盗まれることによって「母性」を学ぶ機会を奪われ、「母性」の欠落した女として描かれるのである。そのような女だから、どれだけ腹が膨らもうと、どれだけ胎動があるうと、「妊娠」を理解することなどできるはずもない。

当時、妊娠初期の場合は病であるのか懐妊であるのかの判断はつきがたく、妊娠は時間の経過によって明らかとなるものであった。⁹さらに、男しか側にいない状況であるから、胎児の存在がはつきりとわかる状態（腹が膨らむ、胎動がある、

など)でなければ、妊娠だと断定はできないはずである。女は、次第に膨らむ腹と胎動とを感じながら、妊娠というものを理解できぬままに、子供にその身体を内側から奪われていくのである。それは、胎内に巣くう得体の知れない何か、自身を蝕んでいくイメージに重なるものではないだろうか。

妊娠した女は身体の中に自分とは別の生き物を宿しているのであって、その身体はもはや自分だけのものではない。女は、男によって家や共同体から生まれ、男の作った庵に据えられ、その身体を表面的に、外側から奪われていく。さらに、妊娠によって、女は孕んだ子供に身体の内側からも浸食されていくのである。また、孕んだ子供は男の血を受けた男の分身のようなものであり、女が外側からも内側からも男に侵されつつある状態であったことが暗示されていると考えられる。

③ 山の井の水―鏡による自己認識―

次に、女が歌を詠む直前の描写について考察する。

この男、物もとめにいでにけるままに、三四日来ざりければ、待ちわびて立ちいでて、山の井にいきて影を見れば、わがありしかたちにもあらず、あやしきやうになりけり。鏡もなければ、顔のなりたらむやうも知らでありけるに、にはかに見れば、いとおそろしげなりけるを、いとはづかしと思ひけり。さてよみたりける。

この記述より前に、「この男いぬれば、ただひとりものも食はで山中にあれば、かぎりなくわびしかりけり」という描写があり、それによって男がいなければ物を食うこともできない女の位置づけがなされている。そこから考えると、女は三日も四日も物を食べていないことが想像され、かなり衰弱した状態であったと解釈できる。加えて、女は妊婦である。厳密に言えば、男を待ちわびていたというよりも、男のもたらす食物を待ちわびていたという方が正しいだろう。

さて、女は山の井にたどり着いた。そこで自身の現在の姿を見るのである。女は以前、大納言の娘であつて、生粋の平安貴族であつたから、ほぼ日常的に鏡に映る自己と対峙していたことだろう。鏡とは自己を客観的に捉えることができる道具であり、他者からどのように見えるかが、自己の目を通してはつきりとわかるものである。つまり、鏡を見て自己の姿を認識することは、自己を客観的に見ることであり、他者からどのように見えるかを意識することなのである。男に盗まれることで鏡を見る機会を失つた女は、そのような「見る」「見られる」という感覚を失くしている状態であると考えられる。

鏡のない世界では、他者の反応や態度によって自己の姿を想像するしかない。盗まれて以後、女の世界に存在する他者は男のみである。例えばその男が、女を容貌の変化に応じて邪険に扱えば、女は男の態度によって自分の姿を意識し、鏡がなくとも自己を顧みることができたはずである。けれども、おそらく男の態度は当初のまま、ずっと変わらなかつたのであろう。変わらず女を愛し続けていたのだ。鏡としての他者が変わらぬ態度で接してくれるのだから、女は自身の容貌が醜く変化したことには気付かないだろう。こうして女は、鏡としての男が映し出す「望むべき自己」¹⁰像の幻想に囲われて、狭い世界で生きていたのである。

男に盗まれることで鏡を失つた女は、山の井の水鏡によって自身の姿を確認する。そこに映る姿は、日常的に鏡を見ていた頃の美しい姿とは全く違つていて、想像していた自己像ともかけ離れていた。ここで表れる「はづかし」は、「社会における自分、他に対する自己を常に意識することから生じる感情である」¹¹から、女は山の井の水鏡に自身の姿を見ることによって、他者の目を再び意識したのだと考えられる。つまり、女が「はづかし」と思ったのは、過去の美しい自分と比較して、現在の自分の容貌があまりに醜く変化していること、さらにその変化を知らずに過ごしていたこと、そしてその変化した容貌を他者に見られることを意識したからであるといえる。しかし、ここでの他者は男ではなく、世間だとか社会だとか、広い意味での他者であらう。なぜなら、男は女の醜い姿を既に受け入れ、変わらぬ愛を注いで生活していたか

らである。したがって、女が見られることを意識し、「はづかし」と思うべき他者にはならない。女にとって、自身の醜い姿を受け入れる男は、真実を映す鏡ではないのだ。そして、そこに男と女の間接的な感覚にずれが生じる。女は自己の醜い姿を受け入れることなどできないが、男はそれを受け入れて生活しているのである。「受け入れる」男と「受け入れられない」女とのずれは、今後の展開を暗示しているといえる。

また、女はここで自己を客観的に見ることで、悲惨な状況にあることをようやく理解し、このような状況に陥ったそもその原因は男にあると気付くのではなからうか。女はここに至るまで様々なものを失っている。しかし、失ったことに気付いたのは、このようにして「鏡」を取り戻し、自己の醜い姿を認識できたからである。

以上、女が歌を詠むに至るまでを三つの観点から確認してきたが、「奪われ」「囲われ」「浸食され」ていく女の姿が浮き彫りになり、男に対する愛情を示す部分などは確認できなかった。さらに女は、悲惨な状況にある自分を水鏡によって認識したことから、男に対する憎しみを募らせていったと考えることができる。

三、女の視点から読む「安積山」の歌

「安積山」の原歌は、『萬葉集』巻一六、三八〇七番の、「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに」であり、左注において、采女が葛城王の怒りをなだめるために詠んだ歌だとされている¹²⁾。『大和物語』では、下の句の歌語をわずかに変えて、次のような和歌となっている。

あさか山影さへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふものかは

先にも述べたが、この歌は、「浅く思ふ」を女の心、「人」を男ととって、女の男に対する愛情を詠ったものだとするの
が定説となっている¹³。しかし、近世の注釈書ではこれとは違う解釈がなされている。『大和物語鈔』の該当部分を次に挙げ
る。

此女我かほのおそろしけに成をしらて山の井に移るるを見て恥かしと思ひ男里に出て帰らぬを我かくなれはすて、こ
ぬ也と恨て古歌の心をかへて捨るほどの浅き心にて遠くさそひくるかといへる心也¹⁴

傍線部に記されているように、こちらの解釈では、「浅く思ふ」を男の心、「人」を女ととって、女の恨みを込めた歌だ
とされている。さらに、近世における他の注釈書についても、これと同様の解釈がなされており、現在の定説となってい
る解釈は、見当たらない¹⁵。このような近世の注釈について、今井源衛氏は次のように述べている。

しかし、これ（近世の注釈 引用者注）では女の死ぬ動機に自分の姿を見て絶望する点（その裏には、男の愛情をい
つまでも得ていたいという女心がある）が弱いものとなり、自分を誘拐して、妊娠すると捨ててしまった薄情な男に
対する恨みだけが強調される結果となって、美しくやさしい女の像としては平俗を免れないし、その後を追った男の
死も哀切さが生きてこない¹⁶。

女が美しくやさしいかは別として、女の死が自身の容貌の変化に絶望したことに関係しているという見解は、確かにそ
の通りであるといえる。しかし、女の視点で物語を読んだとき、歌を詠むに至るまでの女の心情表現には、男に対する恨
みしか読み取れず、男の愛情をいつまでも得ていたいという女心は、歌の定説によって導き出されたものである。また、

森本茂氏は次のように述べる。

「浅くは人を思ふものかは」について、『鈔』『抄』などの諸注は、男が帰らないのを承けて、男の心が浅いとみて、男を恨む歌とする。しかし、そうすると、万葉集・三八二九の左注の内容とも合わないし、男が三、四日食物を捜しに行つて帰らないのを誤解して、男に捨てられたと女が判断したことになり、あまりに短絡的すぎる。¹⁷⁾

確かに本段の和歌は『万葉集』を原歌としているが、その和歌に伴う物語が違うのならば、『万葉集』の歌意を受け継ぐ必要はない。森本氏の解釈は、『万葉集』を意識するあまり、『大和物語』自体の内容を見ていないようである。『大和物語』の解釈においては、次に挙げる時枝誠記氏のように、『万葉集』から離れて考えるべきである。

今、万葉集の歌を離れて、大和物語の説話自身から判断すれば、女は、男が女の顔の醜くなつたことを嫌つて自分を捨てたものと考へ、男の軽薄を恨んで思ひ死にをしたのであるから、「あさく」は本単元の方法に従つて、男についてその述語として用ゐられたものと解するのが正しいことになる。¹⁸⁾

やはり歌を詠むに至る状況から考えても、女が男への愛を込めた歌を詠むことは不自然である。では、女は何を詠ったのだろうか。物語の展開を冷静に追つていけば、それは「恨み」である。しかし、近世の注釈や時枝氏の言うような、男に捨てられた恨みではない。なぜなら、女は男に捨てられたとは思つていないからである。それは、次に挙げる部分から読み取ることが可能である。

あさか山影さへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふものは

とよみて、木に書きつけて、庵に来て死にけり。

「木に書きつける」という行為は、その歌を残そうとするものであり、明らかに誰かに見せようとする意思が感じられる部分である。ここでの「誰か」とは男以外に有り得ない。女は男に歌を見せるために木に書きつけたのである。つまり、女には男が帰ってくるであろうことが予想できていたわけである。

男に捨てられたと思ったのではないなら、女はなぜ男を恨んだのだろうか。それは、女自身をこのような状況に追いやったことに対する恨みなのである。水鏡に映る自己を見ることで、女は自己の状況を客観的に捉えることができたのだ。そこで思い及ぶのは、醜い容姿に変化してしまうほどに貧しく、不便な庵での生活と、それを何年もさせてきた男に対する恨みである。

女が「はづかし」という言葉で比べた過去の自分は、何の不自由もなく、裕福で恵まれた生活をしている美しい自分である。ここで、醜い容姿を現在の生活、美しい容姿を過去の生活と置き換えるならば、女にとっての幸福はやはり過去の生活にあったといえよう。なぜなら、女が追い求めているのは過去の自分であり、現在の自分は受け入れられないからである。女が現在の生活に満足するためには、過去と同等の美しい容姿や、裕福な生活が必要なのである。それを与えられない男など、女にとって幸福を奪い去った恨めしい存在でしかない。さらに、一人では物を食うことのできない、妊婦である女を三日も四日も放置するなど、あつてはならないことである。そして、そのような「恨み」の感情によって、「あさくは人を思ふものは」が導き出される。意味としては、「これほど薄情な気持ちで人を思うものだろうか」となるだろう。

四、男の視点から読む「安積山」の歌

男の視点から物語を読むと、男は置いていった女の姿と、死んだ女の姿しか見ておらず、自分のいない三日四日の間に女が何が起こったのかはわからない。つまり、女の死んだ理由は和歌によってしか掴めず、明確には理解できないはずなのである。肝心の和歌の意味と云えば、男に対する恨みである。それにも関わらず、男は死を選ぶ。ここで立ち止まって考えたい。男は自分のいない間に起こった女の感情の動きを知らないのだ。男が知っているのは、自分がいなければ生きていけない女、ただひたすらに自分の帰りを待つ女である。男に対する恨みを抱いた女の姿など、想像もできないはずなのだ。このように考えると、「安積山」の歌に、男にとってたいへん都合のいい解釈が生まれる。

安積山の姿まで映って見える山の井が浅いように、浅い心であの人を思っていたことでしょうか。そんなことはございませ¹⁹ん。

男の視点から物語を読めば、このように定説通り解釈することも可能であろう。男は庵で女の死を見、山の井で歌を見る。そして、女の自殺の原因を勝手に解釈して、女を思っ^て死んでいくのである。

しかし、女の視点から物語を読み直せば、これはやはり不自然である。醜い容姿を受け入れられない女と、受け入れて変わらぬ愛を注ぐ男との感覚のずれは、和歌の解釈にまで影響を及ぼすのである。男と女は最期まで互いにずれた感覚を持ち続け、死んでいくのだ。

五、女はなぜ庵に戻って死んだのか

女は「庵に戻って死ぬ」ことを選んだ。ただ死ぬだけなら、和歌を詠んだ山の井で死ぬばよい。しかし、わざわざ庵に戻るといふことは、庵で死ななければならぬ理由があつたわけである。なぜ庵に戻って死んだのだろうか。その理由こそが、本段の解釈に大きく関わってくる。

女が自殺するに至つた直接的な理由は、自身の容貌の変化にある。立石氏は「女の自死の理由は、男への愛に根ざした恥じらいではなく、自身のアイデンティティの崩壊にある」と述べているが、これはその通りである。前述したように、女からの男に対する感情は「恨み」であり、女の死に、男への愛や恥じらいはもちろん関係していない。もし、愛情や恥じらいが関係しているのなら、わざわざ庵に戻って愛する男に醜い死に姿を見せたりはしない。庵に戻って死ぬということは、男に確実に自分の死を見せることに繋がる。では、なぜ男に自分の死を見せる必要があつたのだろうか。

物語を女の視点に戻して考えよう。女は男に和歌を見せるために木に書きつけ、庵に戻って自殺する。今の生活が受け入れられない女は、死ぬしかない。一人では生きられない女にとって、死ぬことこそが男から逃れる唯一の手段であるからだ。そして、自身を蝕んでいく男の分身とも言うべき子供や、醜く変化してしまつた自身の容貌など、その全てを無に返そうとするのである。男は女の書きつけた和歌を読み、女の死の理由を勝手に解釈し、女を思つて死んでいく。つまり、男の死には、確実に女への愛情が関係しているのである。よつて、男を死に追いやるためには、女の死が必要不可欠であつたと考えられる。女が庵で死ぬことは、男に自分の死を見せ、男を確実に死に追いやるための手段とも言えるのである。

六、おわりに

以上、女の行動や状況を細かく読み直すことにより、男に不条理に「奪われ」、身体的に「囲われ」、子供によって「浸食され」る女の姿を確認してきた。そこには、男によって何もかも奪われていく女の姿が書かれている。また、山の井の水鏡によって、女は、失った他者への意識や自己を認識する感覚を取り戻し、自身の悲惨な状況を客観的に捉えることができるようになった。それによって、現在の生活の一切が男によってもたらされたものだど気付き、「恨み」の思いを募らせていくのである。

女が詠んだ歌の根底には、自分をこれほどまでに醜くした男に対する「恨み」がある。手習歌として有名な「安積山」の歌意とは正反対であるが、同じ和歌でもそれに伴う物語が違えば、自ずと歌意も変化する。また、その違いにこそ本段の面白みがあるのではないだろうか。

女が己の現在の容貌を見たとき、もし男と共に生きる道を選ぶのなら、女は現在の自分を受け入れなければならない。しかし、女が選んだのは「死」である。女は結局、現在の自分を受け入れることなどできなかつたのだ。そのように「受け入れられない」女と「受け入れる」男とのずれは、本段の和歌の解釈においても食い違いを見せている。女は「恨み」を込めて「安積山」の歌を詠み、男はその歌に「愛情」を感じてしまう。このずれは、結局最期まで修復されずに存在し続けることとなる。

男は確かに女を愛していた。醜い姿が変わっても、それを受け入れて愛し続けた。一方、女は男が帰ってくるであろうことを想定しており、男が自分を愛していることもわかつていたはずである。けれども、女は男に愛情を抱くことはなく、むしろ、男への思いは自分をこのように醜くしたことに對する「恨み」なのであった。女は最期まで男の愛を受け入れる

ことができず、自分の醜い姿に絶望して死んでいった。これは自分を愛していた男に対する復讐である。女は庵に戻って男に自分の死を確実に見せることによって、男を死に追いやったのである。

注

- (1) 柿本奨『大和物語の注釈と研究』（武蔵野書院、昭和五六年二月）
- (2) 「山の井に映った自分の姿を見て、「いとほづかし」と思ったのは、男への愛情があつてのこと」（森本茂『大和物語全釈』大
学堂書店、平成五年一二月）など、本段において女の愛を読み取ることは定説となつている。
- (3) 立石和弘「男が女を盗む話」（中央公論新社、平成二〇年九月）
- (4) 小谷雅司「男が女を盗む物語―身体・イデオロギー・通過儀礼―」（『国語国文学研究四六』熊本大学、平成二三年二月）
(5) 注1に同じ。
- (6) 今井源衛『大和物語評釈 下巻』（笠間書院、平成一一年三月）
- (7) 小嶋菜温子「平安前期物語の〈家〉と性・身体―『竹取物語』『伊勢物語』から『平中物語』『大和物語』まで」（『源氏物語の
性と生誕―王朝文化史論―』立教大学出版会、平成一六年三月）
(8) 注7に同じ。
- (9) 「懐妊はまず身体の変調と捉えられる。妊娠初期の場合、それが病であるのか懐妊であるのか、なかなか判断がつきがたく、
したがって、公家貴族の家では医師が招かれて妊娠初期にかかわっている例が多い。《中略》判断のむづかしかった懐妊も時間の
経過によって次第に明らかなものとなるが、『和名類聚抄』に「択食」と記されている悪阻は、懐妊を決定づける大きな徴候と古
くから考えられていた。『とはずがたり』巻一には、悪阻を「心地例ならず覚えて、物も食はず、しばしば風邪など」と思ってい
たとあり、初めての妊娠の場合、風邪との区別はつきがたいもののものである。」（新村拓『出産と生殖観の歴史』法政大学出版
局、平成八年一月）
- (10) 立石和弘「鏡のなかの光源氏―光源氏の自己像と鏡像としての夕霧―」（三田村雅子ほか編『源氏研究 第二号』翰林書房、平

成九年四月)において、本段の女は「望むべき自己と望まざる自己との齟齬に揺れ」る存在として取り上げられている。また立石氏は、鏡をめぐる発想の物語受容に關して、「鏡に映し出された像が、決して自らが思い描く自己像ではないにもかかわらず、我が姿として受け入れざるをえない主体の、引き裂かれ苦悩する精神の内奥に転換し主題化する」ことを述べている。

(11) 中川正美「平安仮名文の「はづかし」付「やさし」「つつまし」」(『梅花女子大学文化表現学部紀要四』平成一九年)

(12) 小島憲之ほか校注・訳『新編日本古典文学全集九 萬葉集④』(小学館、平成八年八月)

(13) 「安積山の形までもくつきりと映って見えるこの清らかな山の泉は浅いが、そのように浅く私はあの人を思っているのではありませぬ。」(柿本奨『大和物語の注釈と研究』武蔵野書院、昭和五六年二月)など、定説である。

(14) 雨海博洋『大和物語諸注集成』(桜楓社、昭和五八年五月)より、該当部分を抜粋。

(15) 雨海博洋『大和物語諸注集成』(桜楓社、昭和五八年五月)に掲載されている注釈書で、該当部分に言及しているもの(『大和物語鈔』『大和物語拾穂抄』『大和物語直解』『大和物語虚静抄』『大和物語錦繡抄』)は全て恨みの歌と解釈している。

(16) 注6に同じ。

(17) 森本茂『大和物語全釈』(大学堂書店、平成五年二月)

(18) 時枝誠記『古典解釈のための日本文法 増訂版』(至文堂、昭和三五年二月)

(19) 高橋正治ほか校注『新編日本古典文学全集一二 竹取物語 伊勢物語 大和物語』(小学館、平成六年二月)

(20) 立石和弘「女性拉致の話型組成」(『國文學 解釈と教材の研究 第五〇巻四号』學燈社、平成一七年四月)

参考文献

- ・阿部俊子・今井源衛ほか校注『日本古典文学大系九 竹取物語 伊勢物語 大和物語』(岩波書店、昭和三二年一〇月)
- ・舟田明子「大和物語の歌説話性と安積山伝説―娘ぬすみ譚を中心に―」(『二松舎大学人文論叢五一』平成五年一〇月)
- ・林田孝和「盗む」/嫁盗み譚(宮崎莊平編『源氏物語の鑑賞と基礎知識九 葵』国文学「解釈と鑑賞」別冊、至文堂、平成二二年三月)
- ・植田敦子「教材研究『大和物語』『安積山』について」(『研究紀要五二』お茶の水女子大学、平成一八年)

・天海博洋・岡山美樹『大和物語（下）』（講談社、平成一八年三月）

（博士前期課程一年）